

短大生のインターネット事情について

～常葉学園短期大学を例に～

谷口真嗣

キーワード／インターネット、SNS、携帯電話、意識調査

1 はじめに

文部科学省では、教育課程において、小学校・中学校・高等学校におけるコンピュータやインターネットの積極的な活用を図るとともに、中学校・高等学校において情報に関する教科・内容を必須としている。また高度情報化社会の到来により、大学に入学する学生の多くは家庭にコンピュータを所有し、手軽にインターネットを利用できる環境で生活している。

一方、コンピュータ以外の情報通信機器として携帯電話が挙げられるが、各シーズン毎に発表される新型機種は、2011年当初より iPhone や Android などをはじめとするスマートフォンが多くなり、今後更に増加させていく予定との報道により、市場はスマートフォン時代到来と俄に活気づいている。それに伴うように学内でスマートフォンを操作している学生の姿を見かけることも多くなっている。これらスマートフォンは、第3世代移動通信(3G)や無線LANを搭載することにより非常に快適で高速にインターネットを利用する事ができ、またタッチパネルをユーザ・インターフェース(UI)とすることで操作性に優れていることが特徴である。更に2012年以降には第4世代移動通信サービスが開始され、より高速通信が日常的になると、今後ますます学生のスマートフォン所持率が高くなることが明白である。

本稿では、学生のインターネットに関する実態調査を行い、現在の短大生のインターネット事情についてまとめる。

2 調査対象

今回調査の対象としたのは、本学の教養教育科目である「情報とコンピュータ」を受講する1年生(音楽科を除く)である。特に1年生を調査対象としたのは、次年度からの新しい対応や取り組みが考えられるからである。

アンケートは学内ホームページから行った。学内向けホームページに掲載されていたため、若干名の有志も含んでいる。

科	1年生	2年生
日本語日本文学科	28	18
英語英文科	34	5
保育科	212	5
音楽科	0	1
専攻科	7	0
合計	281	29

3 分析

以下では学生に行ったインターネットに関する実態調査を分析する。

3.1 家庭でのコンピュータ所有率

今回の調査では310人中285名（91.94%）が家庭でコンピュータを所有している結果となった。これは内閣府調査^[1]による平成23年3月現在での一般世帯におけるパソコン普及状況が76.0%であったため、本学学生でのコンピュータ所有率の高さが窺えた。（参考までに2002年に行った調査^[2]では、入学後のコンピュータの所有率は77.02%であった事を付け加えておく。）

また所有者285名中、学生が「個人専用に所有している」のは70名（24.56%）だった。

3.2 携帯電話の所有率と台数

【質問】「携帯電話をお持ちですか（複数回答可）」

持っていない	docomo	au	Softbank	ウィルコム	その他
0	138	91	89	42	2

上記のデータから「学生が所有する携帯電話の台数」を整理したものが、右表である。

複数台携帯電話を所有している学生の内訳を見ると、45名（14.51%）全員がSoftbankまたはWILLCOM所有者であった。両社共に同一キャリア内通話無料サービスを行っていることから同サービスの利用を目的としたものと考えられる。

所有台数	人数
1	265
2	40
3	4
4	0
5	1

3.3 インターネットの利用

【質問】「あなたは普段、どこからインターネットを利用していますか
コンピュータや携帯電話を問いません（複数回答可）」

場所	人数
自宅	262
学校	180
携帯電話	270
友人・知人宅	48
通学时	126
公衆無線 LAN/ホットスポット	14
その他	10

「学校」という回答には授業も含まれている可能性は捨てきれないが、「携帯電話」が270名（87.10%）であることから、学生がインターネットを利用することは場所を問わず日常的なことだと読み取ることができる。一方、回答の矛盾を除きデータを修正したところ、授業以外でできるだけインターネットを利用したくない、または関わりたくなくと推測される学生が10名いた。

⇒根拠：「インターネットを利用していない」の選択者、及び「利用している」が利用場

所で「学校」や「その他」のみを選択している者。

3.4 SNSについて

現在、インターネットにおけるコミュニケーションの流れは、発信者側からの一方通行だったホームページやブログから、mixi や twitter などの様に気軽に情報を交換できるツールである SNS (Social Network Service) による双方向コミュニケーションへと変化している。そこでインターネットで急激に拡張する SNS を例に、学生の意識を調べた。

3.4.1 SNS とは何か

日常的に学生と会話をしていると、学生の用語理解が乏しい点に気がつく。その為、以下の説明の前後で同じ質問を行った。

SNS (Social Network Service) とは社会的ネットワークをインターネット上で構築するサービスを指します。代表的な SNS として、日本最大の会員数を持つ「mixi」、モバイル向けの「GREE」、「モバゲータウン」、「twitter」、海外では世界最大の会員数を持つ「Facebook」などがあります。ここでは「リアル」や「前略プロフィール」も含むこととします。

【質問】 「SNS を知っていますか／どの程度知っていますか」

回 答	説明前	説明後
他人に説明できる程度知っている／知っていた	15	↑ 34
大体知っている／知っていた	81	↑ 176
聞いたことはあるが知らない／知らなかった	104	51
知らない／知らなかった	110	49

予想通り SNS とは何かという用語理解よりもサービスの利用を重んじる傾向が読み取ることができた。これは調査時点において既に275名 (88.81%) が何れかの SNS を利用中であることから推測できる。

以下は代表的な SNS サービスについての登録／利用状況である。

SNS 名	人 数
mixi	206
GREE	108
モバゲータウン	86
Facebook	26
twitter	111
リアル	148
前略プロフィール	111
その他	45

※以降の割合は SNS 登録者275名について算出した。

3.4.2 登録時期とその動機、現在継続している理由

【質問】「一番最初に登録した時期はいつですか」

時 期	人 数
小学生	6
中学生	121
高校生	120
大学生	28

携帯電話所持の低年齢化に伴い、SNS 利用者の低年齢化も現在社会問題となっており、今回のアンケート結果からも思いがけず一致していることを知ることとなった。

余談ではあるが、総務省は2010年から携帯電話各社に対し、SNS へ利用者の年齢情報を提供するよう求めている。また SNS には取得した年齢情報を使用することで青少年のサービス利用を制限するよう促している。これにより、携帯電話で SNS に登録する際に低年齢者の利用を制限することができ、インターネットを介した犯罪に巻き込まれるケースから多少なりとも遠ざけることが期待できるだろう。

【質問】「始めたきっかけは」

「現在、利用を継続している理由は何ですか」 ※共に複数回答可

内 容	始めた…	継続を…
友達がやっていたので（いるので）	242	↓ 171
世間で話題になっていた（いるので）	72	↓ 36
リアルタイムに情報を得ることが可能なため	58	↑ 112
情報発信をするため	28	32
趣味・娯楽のための情報収集をするため	75	↑ 103
好きな有名人のことを知るため	41	50
友達や知人とのコミュニケーションのため	117	111
友達や知人以外の誰かと知り合うため	26	19
なんとなく／暇つぶし	123	↑ 149
その他	16	12

さて SNS を利用したきっかけであるが、「友達がやっていたので」が242名（88.00％）と予想通り過半数を占めた。「友達や知人とのコミュニケーションのため」や「なんとなく／暇つぶし」を多く選択されているも予想通りであったが、数は少ないものの「友達や知人以外の誰かと知り合うため」が26名（9.45％）と出会いを求める目的での利用者もみられた。

次に現在 SNS を継続して利用している理由であるが、88.00％→62.18％へと数は減るも「友達がやっている」が同様に1位であった。しかし「リアルタイムに情報を得ることが可能なため」や「趣味・娯楽のための情報収集をするため」が増加していることから、利用していく中で他者主体から自分主体へと価値観が移行している様子が数に表れていると感ぜられる。

3.4.3 利用サービスと特徴

SNS で提供されるサービスについての利用状況であるが、項目数が細かく多岐に渡るた

め詳細な表は割愛させていただくが、[日記・ブログ機能]の利用者がほぼ全員の271名(98.55%)、[ゲーム]利用者は123名(44.73%)、[足跡機能]利用者は106名(38.55%)であった(複数回答可)。

【質問】「日記・ブログ機能について(複数選択可)」

	人 数
利用していない ※	28
個人的な内容(日記やつぶやき等)の発信	200
知人等へのコメント程度	116
ニュースなどの社会的な情報の発信	19
閲覧のみ	44
その他	9

※ [利用していない]を選択しているにもかかわらず“発信”を含む項目を選択している者を対象人数から削除(10名)した。

特に[個人的な内容(日記やつぶやき)の発信]が200名(72.73%)と過半数を占め、続いて[知人等へのコメント]は116名(42.18%)と、日常生活の延長線上にSNSを位置づける傾向があることが窺い知れた。これは、SNSの主たる目的であるコミュニケーションツールとして十分に活用されており、常に友人や知人などの他人と繋がっていたいという現れではないかと思われる。

3.5 ネットの危険性

インターネットを利用していく上で必ず問題となるのは、危険性認識の欠如である。例えばmixiやtwitter上に書かれる内容には個人を特定できるだけの情報が多く掲載されており、掲載者が自覚していれば別ではあるが、多くの場合気がつかず書き込んでいるのが多いのではないだろうか。

以下はネットでの危険性についての関連項目である。

3.5.1 ネットの危険性について知る機会について

【質問】「今までインターネットの危険性やその対応などを知る機会(授業や講習会など)はありましたか」

	人 数
はい	212
いいえ	63

ネットの危険性を知る機会として学校や地域、各種団体等が行っている授業や講習会等が挙げられる。今回、学生にとって“ネットの危険性について知る機会があったか”質問を行ったわけであるが、63名(22.90%)の学生にとって特別な講習を受けた認識がないことが分かる。

3.5.2 個人情報の書き込みによるリスク

SNSによっては登録時に実名を要求するものもあるが、学生が実際に書き込んでいる記事を読むと普段会話をしている口調そのままに書かれていることが非常に多く見受けられる。その為、以下の説明の前後で同じ質問を行った。

過去に書かれた記事や学校名、個人名、ニックネームやそれらの伏字(例：SM○Pの木○拓○等)などから推測して個人を特定することは可能です。

【質問】「実名での登録や個人を特定できる内容を書いたことがありますか」

	説明前	説明後
はい	159	168
いいえ	116	107

私達がインターネットに書きこむ内容として日常的な話題、特に楽しい話題や他人に不快だと感じさせない内容の場合であれば、例えそれが個人名であっても問題はないと考える人が多いのではないだろうか。しかし個人情報の流出の観点で考えた場合、決してお勧めできるものではないだろう。また Twitter 等の SNS で流れる彼らの発言では、伏字や彼らなりの隠語を利用することで情報の流出時におけるリスクを回避/軽減しようとする様は私たち社会人と同様であるように見受けられるが、説明にもあるように過去に書かれた記事や文脈の流れで個人を特定することは容易で非常に危険性を伴っている。

アンケート結果では、[実名での登録や個人を特定できる内容を書いたことがある]が168名、その内、実に94.64% (159名)が個人情報を発信していることを「認識していながら発言している」ことが分かった。これは“認識せず発信しているのでは”という予想に反した結果であり、寧ろ、発信することによる危険性を更に伝える必要性を感じた。

3.5.3 心の距離

【質問】「SNSを通じ、相手の距離はどのように感じますか」

	人数
かなり身近に感じる	11
身近に感じる	111
通常と変わらない	127
距離を感じる	23
非常に距離を感じる	3

アンケートを見ると、[身近に感じる][かなり身近に感じる]のは122名(44.36%)と割合は多い。一般的にSNSに限らず交流が深まることで心の距離が近づくことは周知のことである。対面によるコミュニケーションの場合、相手の発する言葉や表情により感情を理解するのだが、コンピュータを利用したコミュニケーションの場合は当然それは成立せず文字のみで理解せざるを得ない。また前者は直接的コミュニケーションであるためリアルタイムであるが、後者はインターネット等を介したコミュニケーションである上に必ず多少のタイムラグが発生する。そのタイムラグのお陰で考える時間が発生し、また少しでも会話がスムーズになるように必要以上の意見の同調が発生するのではないだろうか。それが『身近に感じる』要因になるのではないかと考える。

次に SNS の機能である“フォロー”や“友達登録”について見てみる。

【質問】「SNS を通じた『友達・知人以外の人』に会ったことはありますか」

	人 数
はい	67
いいえ	208

【質問】「友達登録やフォローなどの内訳を教えてください」

	人 数	▲
友達・知人のみ	135	19
友達・知人の割合が多い	97	30
同じくらい	23	13
友達・知人以外の割合が多い	15	5
友達・知人以外のみ	5	0

※項目▲は「SNS を通じた『友達・知人以外の人』に会ったことがある」人の内訳。

『友達・知人以外の人』に会ったことがある割合が67名（24.36%）も然る事ながら、一見“フォロー”や“友達登録”に警戒していると見られる学生ほど会っている比率が高い結果が出た。口頭による聞きとりでは、その相手は“趣味が同じ”であったり“友達・知人の更に友達・知人”である場合が大半を占めた。

3.5.4 トラブルについて

【質問】「SNS や掲示板を利用して困ったことやトラブルはありましたか」

	人 数	3.5.1 [はい] 選択者内訳
はい	51	39
いいえ	224	129

SNS 利用者全体の18.55%（51名）が何らかのトラブルにあったことがある結果となった。実際に起こったトラブルとしては、[知らない人からの友達登録や要求] や [不快なコメントや書き込み]、[書き込んだ日記などによるトラブル] などが挙げられた。

4 あとがき

今回の調査により、学生は携帯電話を利用することで手軽にインターネットを通じ他者とのコミュニケーションを行なっていることが改めて分かった。そこでは、当初持っていたであろうグローバル・コミュニケーションの場への書き込みにおける危険性の意識が利用時間の経過と共に薄れ、まるで日常生活の延長であるかのように危険性をあまり感じず個人情報を発信していく。非常に由々しき事態である。

私事ではあるが、講義初期の冒頭で必ず学生の『意識の改革』を行うようにしている。前略プロフィールを例に挙げるならば、“高校名またはその略称”や“現在の大学名またはその略称”を入力し検索結果をスクリーンに投影する。すると沢山の登録ユーザーがスクリー

ンに映し出され、途端に教室がどよめくのである。続けてスクリーン上で任意のユーザをクリックすると、その人物の写真及び登録されている内容が大きくスクリーンに映し出され、先ほど以上のどよめきや動揺が教室に広がる。『自分だけは大丈夫だろう』や『TV や新聞、ネットの中の出来事』などではなく、実際の例を挙げ、直ぐ側に危険は確かに存在するのだということを認識させる必要があるのだと考える。

また、小・中・高等学校では授業で少なからずネットの危険性について触れられているはずであるが、3.5.1でも分かるようにそれらの知識を得てこなかったという者もいるのは事実だ。携帯電話所持の低年齢化に伴い、早期に携帯電話やインターネットの危険性などを知る機会を設け、その後も継続的に地道な指導・周知していくことが必要だろう。

※引用文献及び資料

- [1]「消費者動向調査」5. 主要耐久消費財等の普及・保有状況（一般世帯）、平成23年3月、内閣府
- [2]「学生の情報環境と取り巻く意識」：谷口真嗣、第33号、常葉学園短期大学紀要(2002)

※mixi は株式会社ミクシィ、GREE はグリー株式会社、モバゲーは株式会社ディー・エヌ・エー、Twitter は Twitter, Inc.、前略プロフィールは楽天株式会社のサービスです。

また、リアルとは短文を登校できる自分専用の掲示板・日記の総称を指します。

※iPhone は Apple Inc.、Android は Google Inc. の商標または登録商標です。